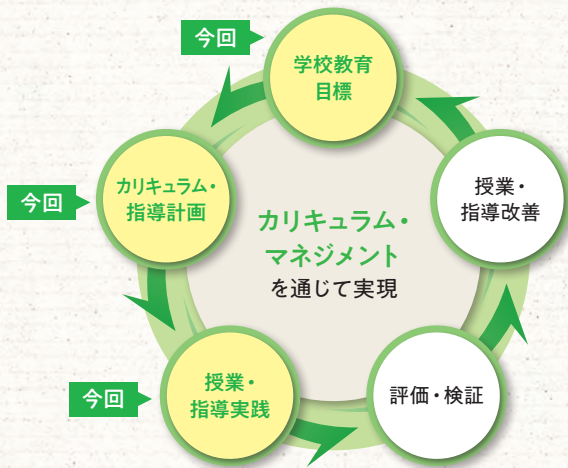


育成を目指す資質・能力を精選し、 学年団の裁量を担保することで、 運用されるグランドデザインを実現

群馬県立吉井高校



◎校訓は、「明るく、清く、正しく、強く、美しく」。2000年度、総合学科に改編。2年次から、文科系列、理科系列、芸術・福祉・体育系列、商業系列に分かれる。地域に開かれた学校を目指し、生涯学習のための学校開放講座や生徒のボランティア活動などに力を入れている。

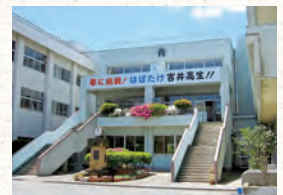
◎設立 1975 (昭和 50) 年

◎形態 全日制/総合学科/共学

◎生徒数 1学年約 160 人

◎2020年度進路実績(現役のみ) 国立大は、群馬大に1人が合格。私立大は、共愛学園前橋国際大、群馬医療福祉大、上武大、高崎商科大、駿河台大、工学院大、国士館大、東海大、日本大などに延べ37人が合格。短大、専門学校進学 66人。就職 34人。

◎URL <http://www.nc.yoshii-hs.gsn.ed.jp>

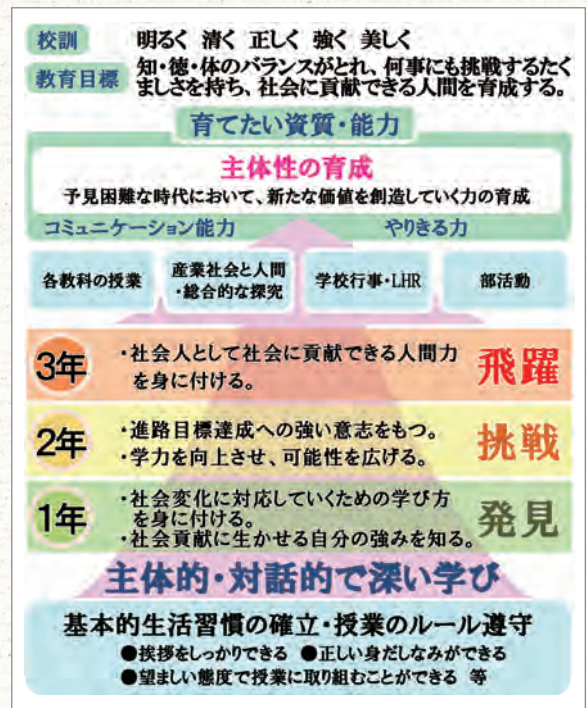


課題はグランドデザインの 学校全体への浸透

群馬県立吉井高校は、2016年度に教育活動のグランドデザインに策定に着手した。その後も毎年見直し、20年度のグランドデザイン(図1)から実質的な運用が始まった。同校がグランドデザインを策定した背景には、生徒の多様性という総合学科ならではの状況があった。大学進学を目指し、勉強を頑張りたい生徒や自分の強みを生かして就職したい生徒、部活動に打ち込みたい生徒など、高校への期待は様々だ。一

方で、生徒への育成を目指す資質・能力が教師間で共有されておらず、指導の方向性が定まっていなかったという課題があった。そうした中、文部科学省から2つの研究指定(※)を受け、問題解決型の学習やアクティブラーニング(以下、AL)の視点での授業改善を始めたことをきっかけに、多様な資質・能力を評価する必要性が高まり、学校全体として進むべき方向性を定めようとする意識が教師間に醸成されていった。そのような背景から、16年度、管理職と各分掌の主任によってグランドデザインの策定が進められた。育

図1 「吉井高校グランドデザイン 2020」



*学校資料をそのまま掲載。

* 2015年度からは、「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」に研究指定。2016年度からは、「教科の本質的な学びを踏まえたアクティブラーニングの視点からの学習・指導方法の改善に係る実践研究」に研究指定。



教務主任
小林良典
 こばやし・よしのり
 教職歴21年。同校に赴任して4年目。数学科。
 進路指導主事
町田貴
 まちだ・たかし
 教職歴16年。同校に赴任して3年目。国語科。
 1学年主任
飯田貢士
 いいだ・あつし
 教職歴19年。同校に赴任して7年目。数学科。
 2学年主任
狩野圭市
 かのう・けいいち
 教職歴16年。同校に赴任して6年目。理科(生物)。

成を目指す14の資質・能力を定め、それらを育成する方策を各教科・科目と各分掌で検討した(図2A)。

しかし、この段階でのグランドデザインは、策定にかかわったのが特定の教師にとどまったこともあり、全教師が当事者意識を持って指導に生かすものとしては浸透しなかった。

全教師が課題を共有し、資質・能力を絞り込む

17年度は、全教師に運用されるグランドデザインにするための改訂に

図2 グランドデザイン策定のステップ

2016年度 ◎管理職・各分掌主任によって、グランドデザインを検討。(A)

育成を目指す資質・能力 ①コミュニケーション能力 ②プレゼンテーション能力 ③主体性 ④基礎的・基本的な知識・技能 ⑤英語力 ⑥グローバル人材 ⑦論理的思考力 ⑧協働性 ⑨多様性 ⑩チャレンジ精神 ⑪豊かな心 ⑫心と体の健康 ⑬文武両道 ⑭創造的表現力

2017年度 課題 学校全体にグランドデザインが浸透しない。

◎管理職・各校務分掌主任・各学年主任の8人による企画会議で、自校の教育活動がグランドデザインの中でどう位置づけられるのかを議論・確認。(B)
 ◎全教師によるワークショップで、育成を目指す生徒像、生徒に身につけさせたい資質・能力、そして、その育成の方策について議論。(C)

◎ワークショップで出された意見を企画会議で検討し、育成を目指す資質・能力を8つに精選するなど、2018年度のグランドデザインの策定につなげた。(D)

育成を目指す資質・能力 ①コミュニケーション能力 ②思考力・判断力 ③表現力・プレゼンテーション能力 ④主体性(主体的に学習・行動する力) ⑤基礎的な知識・技能 ⑥やりきる力・レジリエンス ⑦自己肯定感・自尊心 ⑧課題解決能力

2018年度 課題 育成を目指す資質・能力は8つでも多く、細かい点で授業や学校行事などの目標と結びついていない。

◎企画会議、全教師によるワークショップで、本当に必要な資質・能力とは何かについて議論。(E)

◎育成を目指す資質・能力を3つに精選したグランドデザインを策定。各教科・科目、学校行事などで育成するための方策を一覧化。(F)

育成を目指す資質・能力 「主体性」「コミュニケーション能力」「やりきる力」

2019年度 課題 ルーブリック作成の過程で、「主体性」を育成する方策・評価と、「コミュニケーション能力」「やりきる力」を育成する方策・評価の区別がつけられないという問題が浮上。

◎企画会議で議論し、「主体性」「コミュニケーション能力」「やりきる力」の関係性を整理して、2020年度のグランドデザインを策定(図1)。

*学校資料、及び取材を基に編集部で作成。

動いた。管理職、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、各学年主任による「企画会議」を隔週で実施。学力向上策や学校行事、部活動等の教育活動がどういった資質・能力の育成に結びついているのか、本当に必要なものなのかを検討した(図2B)。

全教師参加のワークショップ(以下、WS)も学期に1回実施。教科や学年を超えた4〜5人から成るグループで、自校の教育活動について話し合った。自校の課題をテーマとした回では、各教師が課題を出し合い、それらを基に教育活動を精査し、改善すべき活動について対応策を検討した。

討した。また、グランドデザインがテーマの回では、育成を目指す資質・能力と、育成の方策を話し合った(図2C)。そうしたWSが、グランドデザインの必要性を全教師に浸透させる機会になったと、教務主任の小林良典先生は語る。

「最初はWSの参加に消極的な教師もいましたが、実施してみると皆、活発に議論し、『やってよかった』といった声が聞かれました。教師間で目標や課題を共有したことで、グランドデザインを自分事として捉えられるようになっていきました」

WSの内容は企画会議で共有し、グランドデザインの改訂につなげた。例えば、「育成を目指す資質・能力が多く、焦点が定まらない」といった声を踏まえ、14の資質・能力が生徒の実態に合っているか、重複していないかを検討し、8つに精選(図2D)。18年度の企画会議でも継続して検討し(図2E)、同校が直面する課題に焦点をあてた3つの資質・能力に集約した(図2F)。

「総合学科である本校には、生徒が自ら進路目標を定めて切り拓いていく『主体性』が欠かせません。また、生徒同士のグループワークで議論が深まらないという課題が浮き彫

りになったこともあり、『コミュニケーション能力』の育成も必須でした。『やりきる力』は、部活動に力を入れてきた本校の歴史を踏まえ、どんな場面でも最後まで力を出し切ってほしいという思いから設定しました」（小林先生）

資質・能力の育成の方策とルーブリックを作成

19年度は、全教科・科目、及び1年次の「産業社会と人間」、2、3年次の「総合的な学習の時間」、学校行事・LHR、部活動のそれぞれについて、3つの資質・能力を「身につけるための方策」を各教科・科目と各分掌で分担して作成。さらに、それを基に、各教科・科目でルーブリックを作った。

ルーブリックの作成前には、教員研修を実施し、学力の捉え方がコンテツ・ベースからコンピテンシー・ベースに転換されることや、ペーパーテストでは測りきれない力を育成し、客観的に評価する必要があることなど、新学習指導要領の趣旨の理解を深めた。

数学科では、自校の生徒の状況を

踏まえてルーブリックの文言やレベルを設定したと、数学科担当で1学年主任の飯田貢士先生は語る。

「問題解決の過程を、ほかの人が見ても分かりやすいように書くことができる」といったように、数学が苦手な生徒でも理解できる表現になるように心がけました」

そのように評価規準が明確になったことで、計算の途中式を書くようになるなど、丁寧に問題に取り組む生徒が増えたという。

一方で、ルーブリック作成の過程では、『主体性』と『コミュニケーション能力』『やりきる力』とで、育成する方策や評価の区別がつきにくい」といった指摘があった。そこで、3つの資質・能力を並列にせず、『主体性』を上位にし、それに付随する資質・能力として、『コミュニケーション能力』『やりきる力』を置く現在のグランドデザインの形とした（P.28図1）。

グランドデザインを基に指導改善が進む

3つの資質・能力を「身につけるための方策」が明確になったことで、

進路指導や教科指導の改善が進んでいる。

「グランドデザインは、策定がゴールではなく、始まりです。育成を指す資質・能力を3つに絞り、育成の方策と評価規準を定めたことで、実効性のあるグランドデザインになりました。教師の会話の中でも、『コミュニケーション能力』や『やりきる力』などがキーワードとして出るようになりました」（飯田先生）

20年度は、全1年生に手帳を配布した。学習や生活の計画を自ら立て、達成状況や課題、次の目標を記録するための。生活を律することで『主体性』を養うとともに、担任とのやり取りを通じて『コミュニケーション能力』を、1年間記入し続けることで『やりきる力』を育むことがねらいだ。また、手帳は、コロナ禍で面談が十分にできない中で、生徒把握のツールとしても活用している。

国語科では、20年度の1年次から漢字検定の全員受検をスタートさせた。進路指導主事も務める町田貴先生は、そのねらいを次のように語る。

「検定という目標を設定すること、『主体性』や『やりきる力』の育成につながると考えています。1.

2学年を通して検定学習を奨励し、学習習慣の定着を促すことは、数学や英語などの基礎学力の向上にもつながるでしょう」

各学年が毎年目標を定め、柔軟に取り組みを軌道修正

学年団の裁量が大きいことも、指導改善が進む一因となっている。同校では17年度、総合学科推進部の主導で、1年次は「発見」、2年次は「挑戦」、3年次は「飛躍」をキーワードとして、探究学習の3年間の計画を策定した。以降、そのキーワードを各学年のテーマとしつつ、学年団の方針や生徒の実態に応じて、学年の目標と取り組みを毎年策定し、グランドデザインに反映している。

「育成を目指す資質・能力と各学年のキーワードは変わりませんが、各学年の目標設定とその達成の道筋は、各学年団に任されています。指導の内容や方法を学年団が決められるようにすることで、各教師の主体性が高まります。そうした柔軟性も、グランドデザインの実効性を担保する上で欠かせません」（小林先生）

20年度の2学年では、キーワード

図3 育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」とルーブリック(抜粋)

■育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」

育成を目指す資質・能力		主体性の育成	
		コミュニケーション能力	やりきる力
身につけるための方策	各教科の授業	国語 言葉を使った活動(言語活動)による意思疎通を目指す。 地歴・公民 グループワーク等で意見交換し、自らの知識や考えをまとめ、発表するとともに、様々な立場や意見があることを理解する。 数学 グループ学習による問題演習を通じて、自分の考えを他者に伝えるように発表する。 理科 課題研究や実験でのグループワークを通じて、問題解決に向けて協力する。 保健 グループ練習を行い、その中で技術向上	自ら設定した目的に向かって、根拠ある自信を積み上げながら、継続的に前進する。 獲得した知識や情報を活用して説明できるなど、年間を通じて、総合的な力を身につける努力を続ける。 発展的な課題にも積極的に挑戦し、諦めずに問題解決に向かう。 授業中に生じた疑問について積極的に質問し、解決する。 記録の向上を目指す。
	「産業社会と人間」 「総合的な探究の時間」	職場体験や吉井ナビなどの活動に積極的に取り組むことで、コミュニケーション能力の向上を目指す。 探究学習の中で、自らの考えを人に分かりやすく伝える。	様々な活動の中で、振り返りまで行うことで、自らの新たな一面にも目を向けてみる。
	学校行事 LHR	グループエンカウンターなども利用し、友好的な人間関係づくりを行う。	LHRで進路目標設定や受験計画作成を行い、その達成を目指し、ひたむきに努力する。
	部活動	定期的なミーティングを開き、部員間の話し合いにより、具体的な目標設定を行う。	挨拶など、基本的な礼儀を徹底する。
		とともに努力する仲間を尊重し、相互理解を深める。	活動日誌に記録して、日々の振り返りの習慣を確立する。

■数学のルーブリック

育成を目指す資質・能力		主体性の育成	
		コミュニケーション能力	やりきる力
身につけるための方策		グループ学習による問題演習を通じて、自分の考えを他者に伝えるように発表する。	発展的な課題にも積極的に挑戦し、諦めずに問題解決に向かう。
評価	A	・先生や友人の意見・考えをきちんと聞くことができる。また、相手の立場に立ち、自分の考えや説明を分かりやすく伝えることができる。 ・問題解決の過程を、ほかの人が見ても分かりやすいように書くことができる。	・分からない問題に対しても粘り強く取り組み、何とかして解決しようとしている。また、間違えた問題に対して、必ずやり直しを行い、理解しようとしている。 ・自分の進路を意識して、継続的に家庭学習を行っている。
	B	・自分の考えを説明し、先生や友人の話を聞くことができる。 ・問題解決の過程を書くことができる。	・分からない問題に対して、先生や友人の手を借りて、最後まで解決する。 ・テスト前には、集中して家庭学習を行う。
	C	・自分の考えをきちんと伝えることができなかつたり、先生や友人の話を理解しようとしなかつたりする。 ・問題解決の過程を書かずに答えだけを書く。	・分からない問題や間違えた問題をそのままにしている。 ・テスト前にも少ししか勉強しない。

*学校資料を基に編集部で作成。

の「挑戦」を基に、「進路目標達成への強い意志を持つ」を目標の1つに掲げた。それを踏まえ、小論文対策や志望理由書、卒業後の自分への手紙の作成などの活動を徹底して行うことで、進路意識の向上に努めた。

例えば、夏季休業中に自分が目指す職業と社会問題の解決をテーマとした小論文を課し、休業明けに生徒同士で読み合った。クラスメートの

夢や自分とは異なる視点などに刺激を受けた生徒が少なくなかったと、2学年主任の狩野圭市先生は語る。「2学年では、自己実現を図るための知的好奇心や意欲、必要な情報を得るための情報収集力など、自分の進路を切り拓く力の育成を意識して指導してきました。その結果、生徒は何事にも意欲的に取り組んでいると手応えを感じています」

あらゆる教育活動を意味づけする意識が定着

グラントデザインの方策を通じて、教師の意識は大きく変わった。「生徒にどのような資質・能力を育成したいのかという目的意識を持つて指導するようになりました。あらゆる教育活動に意味づけができるようになったことが、指導改善に

つながっています」(小林先生)

年2回行う生徒の自己評価では、1回目より2回目の方が、3つの資質・能力が向上したという結果が出ており、指導改善の効果がうかがえる。

今後の課題は、資質・能力のさらなる育成に向けて、文部科学省の「IGAスクール構想」によって活用の幅が広がるICTを、授業に効果的に取り入れることだ。教員研修などを通じて活用法を模索し、学校全体で共有していく。加えて、ルーブリックの運用レベルを学校全体で高めることも課題だ。20年度の2学期には、改めて新学習指導要領の趣旨の理解を深めるために研修を実施し、各教科・科目で育成を目指す資質・能力を「身につけるための方策」とルーブリックを見直した(図3)。

「教科・科目によっては、ルーブリックよりも振り返りシートやポートフォリオの方が評価ツールとして運用しやすいかもしれません。教科・科目の特性に応じて、あらゆる可能性を検討したいと思っています。また、今後は学校行事や部活動のルーブリックも作成し、すべての教育活動を通じて生徒の資質・能力を高めていきます」(小林先生)